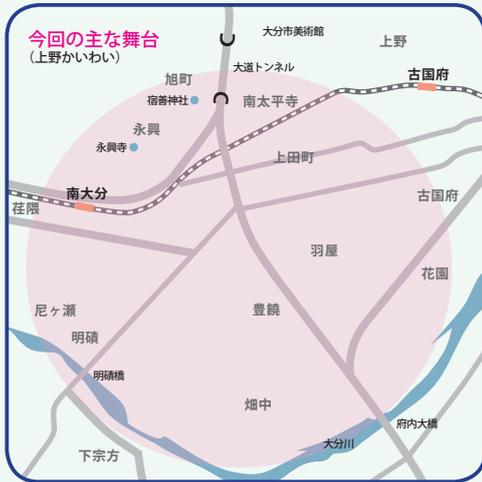


渡辺克己著



第二十三章・南大分かいわい②



第二十三章 ●南大分かいわい②

奥付け／デジタルブックについて

- ・ 永興の石屋
- ・ イボ地蔵さま
- ・ 火焼き
- ・ 伝説の宝庫
- ・ 初瀬井路
- ・ 濁った井路
- ・ 残酷物語り
- ・ コイの養殖
- ・ 太平寺の
- ・ アミダさま
- ・ 火の祭典
- ・ 古国府の古都
- ・ 首切り堂の
- ・ 「材木屋さあん」
- ・ 坂道

発行に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37 (1962) 年 11 月から翌 38 (1963) 年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58 (1983) 年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8 (1962～63) 年当時のことです。▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58 (1983) 年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。

永興の石屋

明治年代、永興には石屋が三十数人もいた。これらの人が永興石を切り出して、神社の鳥居、カラシシ、人物像などの高級彫刻をはじめ、石がき造りや、家屋の土台造りまでやっていった。

石切り場は、八幡社の上あたりから深河内に至るまで、いくらでもあった。

まず上土を落としてから、石の切り出しにかかるのだが、上層部の石はやわらかくて細工しやすいので、彫刻もの。中層の石は比較的堅く、これを黒ガラスと呼んで石がきや土台石。下層部はモドリといい美しい石がとれるのだが薄いため細工ににくい。こういったような分類によって、それぞれ石出しをするのだった。

いまのように各種の機械が発達していない時代のことだから、多くの労働力が必要だ。落とした上土のかたづけや、現場から石をおろす仕事。いまでこそぐり石は金になるが、明治ごろは石くずの利用がなく、それを捨てる仕事もバカにならなかつた。

このような、直接石屋の仕事でない労働力は、永興かいわいの農家の重要な副業となっていた。がんらい永興は耕作地の少ない土地だ。農専業では暮らしむきが立たない。何か副業を持って現金収入をはからねばならなかつた。だから土地の人で、父祖が石に関係した仕事をやらなかつたものは、おそらくないだろう。

石材にはそれぞれ特徴やクセがある。だからその石に慣れた

石屋でないといい仕事ができないわけで永興石を積み出せばどこまででも永興の石屋がその石について行ったものだそうだ。

しかし、明治、大正年代は、石がきを築く石職人の腕をみかく場が少なかった。それで鉄道建設が始まると石職人は歓喜した。困難を克服して石がきを築く大工事がたくさんあったからだ。鉄道工事に行くと、こういわれたものである。「××さんは鉄道に行ってきたので腕があがった」

石屋の中でも、秋月有さんなどは名匠といわれるにふさわしい人だった。この人は彫刻が主で、石灯ろう、カラシシ、人物像などに腕をふるった。この人の後えいがいま別府で石屋をしている。

石がき造りでは秦万平さん、甲斐文治さんなどは名人かたぎの人だった。

「バンジョウがね（曲尺）の裏目八字が続めんようなものは一人前の石職人じゃあないよ」

万平さんはそういつて若いものをシツタしていたそうだ。裏目八字というのは曲尺の裏にむずかしい字で財、病、離、義、公、官、害、吉の八字が刻んである、あの字のことだと、永興で一軒だけ父祖の業を継いでいる石彫刻師大久保武夫さんが話してくれた。当節あの八字が続める石屋や大工は数少ないそうである。

甲斐文治さんは、でしたちが「石匠・甲斐文治」の碑石を建立しているが、まだ八十幾歳で健在だ。

永興石は、いま細々ととれている。石はあるのだが上土が深くてとれないのだそうだ。

イボ地藏さま

深河内（永興）のイボ地藏さまの人気は、いまもあまり衰えていないようだ。

昔府内城主大給公の愛馬の足にイボが無数にできたので谷村の大將軍さまにお願いすることになった。

途中イボ地藏さまの付近を通過したので、ふとその効験を思い出し、馬上から祈願した。すると、いつとはなくイボが落ちてしまった。そこで大給公はお礼に一体の地藏尊を奉納した。いまでも大給の紋所を屋根に刻んだ地藏尊があるそうだが、先日お参りしたとき確かめることをうっかり失念してしまった。

とにかくイボ地藏さまのききめは、かくのごとくあらたかだそうである。南大分かいわいで、数人のお年寄りに会ったが、いずれもその靈験を確信をもつてたたえていた。本人、または身近な人畜がイボを落としてもらった経験があるというのである。

この奇妙なお地藏さまにひとめお目にかかりたいと思ってお参りしたが、大イチョウの青葉の陰に沈んだ境内には、大小無数のお地藏さまがござって、どなたがご本尊か見当がつかない。かたわらの堂守りの家は、あけっぱなしのまま人影がなく、風がすすけたへやを吹き抜けていた。しばらく待っていたら、おばあさんが帰ってきた。つれあいには、もうだいぶ前に死別して、たったひとりで堂守りをしていると、たずねないことまで話してくれた。

おばあさんの説明によると、ご本尊は、お堂の奥がほら穴の

ようになっていて、その中に二体安置してあるが見ることができないという。なるほど仏壇の奥にフロ敷きぐらいの大きさの紫の布がぶら下がっていた。その中だそうだが、なんと粗末な、うすよごれたお仏壇だろう。なにしろ、いまでも昔ながらに参りはあるらしいが、お礼は赤飯をたいてお供えするのがしきたりだ。お堂の修理などできっこない。

そのお供えの赤飯すら、大正年代の永興付近の悪童どもは、こっそり失敬して、ヤブの中でばくつくスリルを楽しんだものだそう。それでもお地蔵さまは、おこりもしなければ、不満もいわない。やっぱりお地蔵さまは庶民的なふんいきの中にあることに、ご満足とみえる。

このイボ地蔵さまの横の坂道を登りきったところが城南団地の造成地である。ここは、為朝伝説につながる尼ヶ城の城跡と伝えられている台地で、この尼ヶ城を築くさい鬼門よけに黄金仏をほらあなに安置した。その黄金仏もいつか草深く埋もれ、村人が地蔵二体を代わりに安置した。これがイボ地蔵の起りだと伝説にある。

なぜイボと関係をもったのか、お地蔵さましか知らないことだが、いまは城南団地工事の騒音の中でイボ地蔵さま自体の行く末に、胸がいつぱいのことだろう。

火焼き地蔵さま

イボ地蔵さまもそうだが、南大分には風変わりなお地蔵さまが多い。

田中に、いまは地区内の寄り合いなどに使用されている勝音院という無住の庵寺がある。この庵寺の横のアゼ道にある火焼き地藏さまなど変わり者の中の最たるものだ。

このお地藏さまは牛馬の健康を守ってくれるのだが、お地藏さまのおからだを盆の十六日に焼かないといけないのである。

昔は、その夜は永興と田中の境の井手のふちに万灯ろうといつてたくさんの口ウソクを立て並べ、こどもたちが、その火でタイマツに点火して地藏さまを焼いたのだそうだが、最近までやっていたのは、ムツカラ（麦から）を家々から持ちよって、それに点火していた。土地の老人のこどものころには、すでにムツカラだったそうだから、タイマツは、ずいぶん古い話らしい。お地藏さまを火攻めにするとき、こどもたちは「エーイバーイ、シヨウバンシヨ、トキノコエ、ハリモドセ」と、はやしたてた。こうして盆の十六日に焼かないと、馬の足が痛むといわれたものである。最近は農耕に馬など使う家はないだろうから、お地藏さまも身を焦がす必要がなくなっただろう。

お地藏さまのお姿は、焼き立てられるので、いまは、もとの形態はまったくなく、地上五十センチばかりの真っ黒な石塊にすぎない。老人にたずねたら、昔は六地藏だったそうさ。たぶん勝音院の門前の小道に道祖神のような役割りをもって立っていたのだろう。

この勝音院は、昔、来迎寺（坊ヶ小路）の支院として、りっぱな堂宇をもっていたということだが、いま前にも書いたように無住の庵寺となりさがっている、この庵の中に延命地藏さまが安置してある。

田中から豊饒に行く道に小さな橋があるが、昔えらい武士が馬に乗ってこの橋を渡ろうとしたら急に馬がさわぎだして武士は落馬した。そんなことが三度も続いたので、ふしぎに思って橋を調べたら、地蔵を横にして橋にしていたのだった。それでさっそくお堂を作って安置したという伝説がある。これが延命地蔵さまで、だいぶん前、その地蔵堂をこわして、庵寺に移したのだという。毎年盆の二十三日に地蔵祭りをしてるが、大正の末ごろ何かのつごうでお祭りをおこたったら、その年大火があつて田中はほとんど全焼したことがあつたという。いらい祭りをおこたらない。

延命地蔵さまにお参りしたとき古いボン鐘が目についた。調べたら寛政十年に村の講中が寄進したと刻んであつた。かつてここにあつた勝音院の鐘なのだ。戦時中に寺の鐘の供出を強制されたとき、世話人たちが鐘をかくして供出しなかつたそうだ。おかげで無事に保存できた。

徳法の妙なる声か勝音院の

身の細うなる夕暮れの鐘

こんな歌が、庵の中にかかっていたと、土地の老人が記憶していて、うたつてくれた。

伝説の宝庫

南大分は伝説の宝庫だ。いまの中年以上の人は、おじいさんや、おばあさんから、土地の昔話をよく聞かされたものだった。

「むかし、むかしあその池にはなア……」

といったような語り出しに、こどもたちは耳をすまして聞き
いったものである。そのような昔ばなしから郷土の歴史への目
が向け、父祖の地への愛着も深くなっていった。いまのこども
たちは、土地の伝説などに興味を示さない。語つてきかせるも
のも少なくなった。耳から耳へ伝えてきた昔ばなしは、もうほ
んど消えかかっている。

昔、永興のヨクジ山付近の農家は、毎朝早くすることもなく現
われる老婆に戸をたたかれた。「早く起きよ、起きて働け」そ
して「あすは雨だ」とか「あすもよい天気」と声をかけて去る
のだが、老婆の姿をみたものはなかった。それでヨクジ山の山
上にある池の主だろうと「ウバが池」と名付け、その池をいよ
いよ大切にした。ウバが池は青くよんだ小池だったが、市長
屋敷ができるさいさらに小さくされいまはわずかにその跡をと
どめるにすぎない。

ヨクジ山の北側の谷間の平地は「蜘蛛園（クモゾノ）」とい
うグロテスクな名で呼ばれている。古老は「クモドン」といっ
ている。

永興の山から植田の山にかけて大グモが巣をにかけていたが一
夜大あらしに耐えかねて墜死した。そのあとをとむらって「蜘
蛛園」と呼んだというのである。このクモは「供物」または「公
門」「公文」の転化で、永興寺に関係のある地名だったのかも
しれない。

豊饒のムラのまん中辺に古い地蔵堂が建っている。いまは、
お大師さま信仰の地蔵堂で、数体のお地蔵さまが、ほこりをか

ぶつて並んでいる。このお地蔵さまの中に、右手にヒシヤク、左手にアカおけを持った、彫刻としては稚拙なものだが、親しみ深そうなお地蔵さまが立つてござる。

このお地蔵さまを「火よけ地蔵」と呼び、「ムラの火災を守つてくださる、だから豊饒には火災が少ない」といい伝えている。

「昔、風の強い火事の起こりそうな夜は、火に気を付ける」とお地蔵さまがおらんで歩いてくれたそうじゃ」

と、親切に案内してくれた老人が説明してくれた。火事になりそうなときは、ヒシヤクで水をかけて消しとめてくれると信じられていたのである。大正ごろまでは、盆の地蔵祭りの日にムラの子どもたちがお堂の前にきれいに箱庭を作り、お地蔵さまをお慰めしていた。

永興の八幡さまの背後の山をサブ山と呼んでいるが、昔、この山の石ビツから金のニワトリが出てきて、これを連れ帰った石屋が大金持ちになったという伝説がある。石ビツ(古墳)から、金のニワトリならぬ財宝が発掘されたのかもしれない。この伝説の石屋の子孫が、後藤という姓で、いまも永興に住み、資産家だということだ。

畑中には、盗人をいませめた伝説を持つ「十輪庵の地蔵」が忘れられかけている。

初瀬井路残酷物語り

水田が水を要求する初夏から秋口までの数カ月、初瀬井路は満々と水をたたえて配水を怠らない。どのような日照り続きで

も、まず大分川の水がかけられないかぎりには、初瀬井路の恵みを受けている田は干ばつに泣くことはない。

初瀬井路の歴史を略記すると、天正十一年（一五八三年）に賀来、荏限（南大分）、笠和（旧市内）各郷の農民の熱望によって、大友義統が東院川（賀来）から笠和郷に至る十二キロ余の井手を掘らせたのが最初である。これを「国井手（または宮苑井路）」と呼んだ。ところが東院川は大分川の支流で水量が少なく干ばつのさいは笠和郷まで水がこない。この欠陥を除くために、日根野吉明が慶安三年（一六五〇年）庄内町櫟木から大分川の本流の水を取り入れてこれを国井手に結ぶ十五キロ半に及ぶ大工事を起こした。これが初瀬井路である。

明治八年に、初瀬井路と宮苑井路（国井手）は水源を一つにしているから名称も統一すべきであるという議が起

バス道沿いの井路（挿絵：田中昇）



こつて初瀬井路一本にした。それまでは東院川を境に宮苑、初瀬の二つの井路名だった。

藩政時代、井路の管理は藩が直接やっていたもので、永興、賀来、挾間の三カ所に水奉行所があり、通水中は奉行が常駐していた。奉行の下に井守りが数人いて、奉行の指揮を受

けて監視の任に当たっていたのである。

永興の奉行所は、現在初瀬井路土地改良区事務所の位置にあった。土地の人は「お小屋」と呼んでいたそうだが、昭和三十二年に事務所を新築するさい「お小屋」は畑中の人に払い下げた。いまでも畑中にあるが、原形をとどめない。

水奉行の仕事は、明治になって戸長に移ったが、現在は常設の配水係長がいる。この配水係長を、いまでも年寄りは「奉行」と呼んでいる。「井守り」は、どうもことばが悪いというので、「監視員」の呼び名に変わっている。

「初瀬」の名の起りは、人柱物語りとむすびついている。櫟木から延びてきた水路が挟間の黒川にはばまれたので、これをまたぐ「持ち土手」を築くことになったが、黒川の水勢に押されて、すぐ流されてしまう。そこで、水神をしずめるためにおきまりの人柱をたてることになった。選ばれたのがおハツという娘。生きながらに土手の底深く埋められたおハツの霊に守られて、堅ろうな持ち土手が築かれた。そこで、おハツの名を永久にとどめる「初瀬」の名をつけたというのである。当世流に言えば初瀬残酷物語り。

封建時代は、工事の進捗や成功をはかる権力者の一つの政策として人柱のいけにえを、よく使っている。「神にいけにえを捧げる」ことで信仰に弱い民心をつかみ、苦役の領民の奮起をうながしたのだ。初瀬井路にしてもこれだけの大工事を短期間にしあげようというのだから、人柱はありうることだ、おハツの犠牲は伝説とばかりはいえない。

黒川をはさんだ中村、上市の両地区は、毎年盆には持ち土手

の上にロウソクを立て並べて、おハツの供養をするのがしきたりで、いまも絶やさず続けているということだ。

濁った井路

それが自然の恵みであろうと、人為によるものでであろうと、産業や生活にもたらす恩恵にたいして当世の人は感謝する心がなくなった。

井路にたいしても昔の人は素朴に感謝をし、たいせつにとりあつかったものである。

先ごろ、水田に送る水を満々とたたえた初瀬井路のふちを歩いてみたが、なんと水のごれていることだろう。にごった水に、野菜くず、紙くず、その他もろもろのあくたが遠慮なく浮いて流れていた。ひどいときは、ヒツジの死体が流れてきたこともあるそうだ。でたらめなヤツがいるものだ。

水流をゴミや汚物処理に利用することを当然と考えているふつこう千万な人間がふえた証拠だ。これは井路にかぎらず、市内の小さな川やミゾでも同じことだ。

明治時代、永興の付近で、魚屋が初瀬井路の流れで、こつそり魚を洗っているのを井守りにみつげられた。井守りは農家の人々と相談して、魚屋に罰として一日中井路のほとりの草むしりをさせた。そういう話が残っている。だから井路でのせんたくなどはもつてのほかだった。

「私が幼いころ、井路に向かって小便をとばした。それをみつけたおばあさんが「井路さまのバチをかぶる」と、塩を持つ

てきて井路にばらばらとまいて清めていた」と老いたお百姓さんが話していた。

また九月一日の風祭りの日には、田の水口に、おみきをあげ、花筒をたてていた。大正年代ごろまでは、南大分かいわいでは、ほとんどの農家がしていたそうだが、いまはめったに見られない。

こんな話を聞いていると初瀬井路にたいして、かつてお百姓さんが、どれだけ感謝の念をささげていたか、痛いほどわかるのである。

だから昔の初瀬井路の水は美しく澄みとおっていた。永興の奥の深河内では明治ごろまでは井路の水を飲み水に使用していたほどだということだ。

最近、初瀬井路の近くに住宅がもりもり建ちはじめた。その住宅群から吐き出す汚水の放出口を井路に求めようとしているため、井路の関係者との間にもめごとが多くなったそうである。井路の美しい流れなど再びみることはできないだろう。それどころか、南大分かいわいの水田は住宅地にどしどし変身している。やがてこの付近では、井路本来の用はなくなって、下水道に落ちぶれる日がくるのではないか。

ところで、大道トンネルのすぐ東側を初瀬井路のずい（隧）道が通っていることを知っている人は少ない。大道トンネルのおよそ二倍の長さを、岩盤をくり抜いて通水している。あまり長いので途中で山上から穴をうがってずい道につなぎ、ここから人がはいつて水路さらえをしていたらしい。その山上からの穴は数年前まで、大道トンネル北入り口の掘り割り付近にあっ

たが、ふさいでしまった。

元町まわりの井路では大道、駄ノ原方面への通水がじゅうぶんでないので、ここにずい道をうがったものだが、この大工事を、いつやったものか、まったく記録がないそうである。

コイの養殖

大道トンネルを抜けて、しばらく行くと、右手にこじんまりと県水産試験場の養魚場がある。

相当広い敷き地をとっているのだが、樹木にかまれているので、こんな場所に養魚場があるとはちよつと気が付かない。

もちろん淡水魚―それもコイの養殖を主としているもので、大分県内のコイ飼育は、ほとんどここが手がけている。

県の水産試験場ができたのは明治三十三年。それまでは水産協会（明治二十七年創立）に補助金を出して水産振興に努めさせていたが、実績があがらないので、これを解散させ、県立の水産試験場を作ったわけで、最初県庁内に設け、三十五年に佐賀関町に新築した。

このとき、コイ飼育を奨励する目的で、荏隈村三芳の稲田一反余を養り（鯉）場として使用したのが最初とある。しかし本格的にコイ養殖に取り組んだのは、現在地に養り池を設けた大正四年からだ。このあたりは湿地帯でレンコンを作るのがせきのやまの荒れ地だった。それを応用して、泥を上げて池とした。むろんいまのようなコンクリートの池ではない。板でかこったお粗末なものだった。現在の養魚場周辺の住宅地は、このとき

上げた泥で湿地帯を埋めて生まれたものだそうだ。

養殖のコイは奈良県から親コイを買い入れた。この親コイに奈良県からついてきた技師の稲田久吉さんが、四年の契約で指導に当たったのだが、そのまま居ついでしまった。最初から手がけた養魚場に離れたい愛情が生まれたのだろう。

現在古びた舎宅兼事務所が養魚場に付設してあるが、あれは佐賀関町の水産試験場から、養魚場新設のさい移したものだそう、耐用年数はとくに過ぎている。ここを根城にして稲田久吉さんはコイの人工フ化をし、幼魚を農家に配り、水田養鯉を指導したのである。

大分郡や玖珠郡方面からお百姓さんがオケをテンビン棒でかたげてコイの幼魚を買いにきた。お百姓さんの肩に乗って、山坂越えてコイの幼魚が県内に散っていったのである。

久吉さんは、ワラジばかりで、それらの農家を回り、指導に努めたのだそうで、大分県の養鯉事業の生みの親のような存在だった。久吉さんは八十七歳の高齢で数年前になくなり、現在久吉さんのむすこの健吉さんが父の仕事を継いでいる。

ここの指導で、コイの名所になったのに安心院町がある、昭和十年から始めて、コイ料理といえば安心院町といわれるほどになっていったが、最近の水田に農薬を使うので水田養鯉がすっかりさびれてしまった。

庄内町がことしからコイの養殖に力コブを入れているそうだが、臨海工業地帯の造成で海水面の漁業が落ち目となっているのだから、淡水魚の王者コイやウナギの養殖が、あらためて見なおされるときがきているらしい。

太平寺のアミダさま

南太平寺、北太平寺の字名は、ここに太平寺という寺院が勢力をはっていたことを語るものだが、その寺院は、大友時代、おそらく永興寺などとともにも島津軍の侵入のさい滅亡したものにちがいない。

藩政時代の記録に「太平寺は太平寺村にあつて村名となれり、天台宗の一寺なりといえり」と伝承を記しているほか、寺屋敷、門前などの地名が、わずかに残っている。

この寺屋敷、門前などの地名は南太平寺のずっと東寄り、鉄道の踏み切りのところから上がった付近で、ここには俗にガラんさまと呼ばれる杵築神社や、石仏がかたまつてある。ガラんさまはガラん（寺院）守護神のことで、太平寺の鎮守であったと伝えられている。

石仏はそのガラんさまと向かいあっている。小さなほら穴をうがって、その中に磨崖石仏を刻んだものだが、荒廃して石仏のおすがたは消えかかっている。もう磨崖石仏としての価値はないのかもしれない。これと背中あわせの位置に、千体仏といわれるお地藏さまがたくさん岩上に並んでムラを見下ろしてじかん。



南太平寺石仏

かつてここに寺院が存在したことを語るものばかりだ。

この太平寺のものだったといわれるアマダさまを、この地の首藤勝美さんの祖先が、お堂を建ててまつったという。勝美さんの祖父儀八さんの代に、光西寺が焼けて本尊を焼失したので、代わりにそのアマダさまを光西寺に献納したそう、いまでも首藤家は光西寺のザイシヨといっているそう。南太平寺には光西寺の墓地があり昔の住職の墓もあるから、もともと何かのつながりがあったのだろう。

南太平寺公民館の西方、消防小屋のところから上がったところに、やはり古い昔、清水寺という寺があったという。坂上田村麻呂が京の清水寺に祈願してエゾ征討に勝利をおさめたので、諸国に清水寺を建立した。そのうちの一つがこの清水寺だと伝えられている。やはり島津の兵乱で焼失した。いまでもある羽屋の観音堂の仏像は、清水寺の本尊だったものだといわれている。

この清水寺の遺跡に、京の清水寺のそれを模したと思われる乙羽が滝と呼ぶ小さな滝がある。いまはほとんど水がかかっているが、これは、肥えびしやくを突っこんだ者があって、それいらい水がなくなると、地区の人がいつている。

この乙羽が滝の近くに木彫りのお地藏さまをまつたお堂があった。地区の古老の話ではこのお地藏さまは、たいへんありがたいお地藏さまで日岡の高城さんと同格と伝えられているそう。日岡の高城さんは安産の霊験あらたかで、いまでも市内の人々の信仰は深い、南太平寺の方は、さっぱり忘れられているわけだ。

しかし、このお地藏さまが左手に持っている宝珠は火を防ぐ水の玉だそうで、おかげで南太平寺には昔から火災がないということだ。

上野台地の南面した山すそのムラ南太平寺。この縁におおわれた古い土には、さまざまの遺物や伝説がまだまだ生のままたくさん眠っているようだ。

火の祭典

明磧の火祭りは楽しい行事だ。天満宮の冬祭りのヨド、十二月二十四日の晩から翌朝まで、境内でさかんに火をたいておこもりをするのである。いまは、まきを集めて燃やしているが、大分川の川原が、現在のように高い土堤となるいぜんは、川原から流木を集め、あるいはヤブを切ってきてどんどん燃やしたものだ。それらの仕事は地区の若いしの担当だった。

いてついた冬空をこがして火花を巻きあげながら燃える雄壮さは、こどもたちの胸をおどらせた。それに、お参りの者にするまう甘酒のうまさ。燃える火に顔をほてらせ、熱い甘酒をすすって夜を明かした思い出は明磧の人はみんな持っている。

明治時代はニギリメシにコンニャクの白あえをお参りの者にふるまっていたのだそうだが、冬の夜のおこもりの食べ物としては冷たいので、甘酒に変えたということだ。

火祭りといえば、山ひとつ越えた志手では、盆行事に、こどもたちがガワタリと呼ぶ火祭りをやっていたが、昭和になって絶えてしまった。

山から切ってきたカズラで、麦カラの束を互いちがいにくくって大きな球をつくり、これを棒の先につけて墓地にくりだすのである。そこでワラ球に火をつけ、力いっぱい振り回すのだ。ワラ球は火勢をつのらせ、巨大な火の玉となってヤミの中をおどった。地区のこどもたちが、みんな一つずつ持つてきて火をつけるのだから、それは、あやしいまでの火の乱舞となつて墓地を埋めつくすのであつた。

ガワタリの語源がわからないが、行事はたぶん迎え火の変形したものだろう。あるいは、「ガ（蛾）渡り」と呼んだ虫送り行事だったのかもしれない。また毘沙門川で泳ぐこどもたちがカツパ（河太郎）に引かれないう、カツパ封じの火祭りだったのが、そのもとを忘れられ、なんとなくこどもの年中行事の一つとなったのかもしれない。

このガワタリのあと、こどもミコシをかついで「ホーライエイヤ、エイヤサノサツサ」と掛け声をそろえて村内をねり歩いた。この掛け声は旧市内のこどもたちが、たなばた祭りの夜ササ飾りを振り回して町をねるときに掛け声でもある。「ホーライエイヤ」は、住吉神や、えびす神が川や海をお渡りになるときの船頭たちの掛け声だ。このような祭りの掛け声が、こどもの祭り行事にもいつとはなく入り込んだものだろう。

古国府の虫送りは、弥栄社のおししさまのお出ましを願ったものだ。おとなもこどもも、えんえんと燃えさかるタイマツを手に手に振りかざして、おししさまのお供をして田のくろをねり歩いた。これも美しい火の祭典だったが、農薬が発達した今日、もう虫送り行事をくわだてるのんきな人はいない。

古国府の古都

千数百年の昔、豊後の地にも王権が浸透して大和朝廷の任命する国司が下向して統治した。その国府の政庁が南大分にあった。いまの古国府の地名やインニヤク社が、その歴史を語っている。

この古国府の国府遺跡や条理制遺構の研究は大分大学の渡辺澄夫教授などが徹底的に調べあげているようで、地区の人たちは、だから、自分たちの土地の歴史については、一応の知識を持っていて。学者先生たちの調査の質問に答えたり、案内したりしているうちに、断片的に知識を吸収していったというわけだろう。

「インニヤクという名がいまに残っているのは、古国府のほかに、全国に二カ所ぐらいしかないのだそうで、貴重なものだそう。国司政庁の印やカギをしまっておく大切な庫があったところだ…」

というふうに、地区の老人は物知りなのだ。

インニヤクさまは、古国府のまん中あたりに、古木がこんもりと茂って、すぐにそれとわかる位置にある。

インニヤクとは国印、倉印などの印章や、国倉のカギのことで「印鎗」と書く。国司政庁では厳重に管理していたのであった。それを保管する官庫はもちろん人民の接近を許さない尊厳を維持していただろう。これがやがて、人民には何かわからないが神聖なものに感じられ、国府消滅後は、信仰の対象にまで高められたのである。いつの時代からか、インニヤク社は大国主命

を祭神としているが、実際のご神体は、見たら神罰をうけると恐れられているので、地元の年寄りたちも見た者がいない。なんでもマス（升）とカギが神体だということだが、ほんとのところはわからない。

インニヤク社の森のそば、下田中地区を歩いていたら、このあたりでは珍しい白い土べいをめぐらせた大きな家が目についた。もうすっかり古びているが、かつての豪勢さを語る建て物だ。

いわくがありそうなので、失礼とは思ったが訪問してみた。上品な老婦人がでてきて、あまり語りたくないふうだったが、これが小野駿一さんの邸あどだった。小野駿一さんといえば、かつての大分銀行の頭取であり、大湯鉄道を起こし、豊州ガス会社、大分セメント会社の社長をするなど、大正年代の大分経済史はこの人を置いては語れない。大正後期の不況の波で一挙に産をなくして小野駿一の名は経済界から消えたが、その風雲児的活躍はいまも中年以上の人には記憶されている。

作家林房雄さんが、不遇な少年時代小野駿一さんに助けられ、この邸に書生として住みこんでいたのは有名な話だ。

邸は、小野駿一さんの三番目の弟徳太郎さんがどうやら維持してきたそうで、その徳太郎さんも数年前になくなって、未亡人が邸の一部を貸し家にして、たったひとり住んでいるのだった。前庭は耕して花が少し植わっているが、りっぱな庭園だったのを、昭和の初めに吉村薬局に売ったそうだ。

「いま吉村家の別府の邸の庭にあるそうです」と未亡人は寂しそうだった。

千年の歳月が織りなした歴史の変転、そしてわずか三、四十年の春秋が描きだす人間の浮沈―それらの実相をインニヤクの森かいわいで、私は目のあたりに見る思いだった。

首切り堂の坂道

南大分が豊後統治の中心地として国府政庁を置いていた時代、背後の上野の台地を越える道はどこにあったのだろうか。

史家は、大分大学経済学部前を通っている上野の峠道を非常に古い道としている。

ところが、南大分の古老は、大道峠ができる前からあった最も古い道は、南太平寺の公民館の横を登る道だと伝えられているといっている。

源頼朝の天下統一で、王朝政治はくずれ、国府は武士による守護職にとって代わられた。その守護職として豊後にくだってきたのが大友氏である。大友氏は最初国府跡を居館として統治の事業に手をつけたようだが、武士の居城としてふさわしくないとみたのか上野の台地に城を築いた。

その城と、まだ府内の町であった南大分一帯との連絡の道は、この南太平寺にくだる道を利用していたにちがいない。南太平寺の坂道にかかる付近に大木戸という地名がいまも残っている。これは山城の入り口に設けられた木戸があったことを語るのではないか。さらにこの付近にムゲヤシキ（武家屋敷か）ツボネ、オカタ（屋形か）などの地名もある。山城への登り口を擁して武士の居館が建っていたのだ。

先日この坂道を登ってみた。道は近年拡張して、途中からつづら折りの登りよい新道ができていますが、旧道にはいると、じめじめした急坂で、山畑に行く人がようやく通れる細道となっている。

八合目ぐらい登ったところに妙な石造物が、かたわらに二基建っている。二基ばかりの細長い角石を土台として、両側に一基半ばかりの石柱を立て紋様を中央に刻んだ屋根型を乗せてある。一見小さな門といった感じた。そして二基とも、がけにくつつくようにすえてあるのだった。

土地の人は、これを首切り堂と呼んでいる。罪人の首を切つて、この角石の上に並べていたものだといひ伝えられているのである。大友の山城の処刑場一あるいはそうかもしれない。

坂を登りきると、この道は東の方、西山城跡といわれる墓地

南太平寺一帯



公園に通じる道と、大道町方面におりる道にわかれてくる。その昔、大道の掘り切りができる前は、庄の原方面へ台地の尾根伝いにいく道も通じていたにちがいない。

がんに昔の道しか通らない弥栄社のおししさまは、いまでも南大分から旧市内にはいるさい、この峠道以外は通らないそうであ

る。

国府時代、そして大友氏がいまの元町一带に府内を移して繁栄するまでは、この峠道を主要路として庄の原から別府方面へ、さらに中央に結びつく連絡路にしていたのではないか。いまそれを証明するものは何もないが、この古い道は歴史家がじっくり研究すれば、おもしろいものが出てくるかもしれない。

「材木屋さあん」

南大分も、キツネやタヌキの出没する寂しい場所が数カ所あった。

南太平寺から古国府にぬけるあたり、いま久大線の踏み切りのある付近をワカヤマと呼んでいたが、明治、大正期はここらあたりは深いヤブで、昼間でもひとり歩きは身の引きまるような思いだった。古国府に所用で出かけても、日の暮れないうちに帰らねばと、早々と切りあげるのがふつうだった。

うっかり長居をして暗くなつてあそこを通ると、持っているチョウチンが、ふと消えたり、とんでもないアゼ道に踏みこんで同じところをぐるぐる回っていたり、いわゆるキツネやタヌキにつままれるということが、よくあったそうだ。

羽屋と古国府の境、いま大分機械工場が、明るい色彩を投げている付近も、大正ごろまでは、こわい場所の一つだった。

あそこはカメモトと呼ぶ土地だそうだが、こどもたちは「砂投げ」といつていた。

道がややカギナリになっているところの左手一带は竹ヤブが

道におおいかぶさるように茂っていて、その背後は、田の余り水を誘いこむ大きなタメ池であった。

昼間でも、その竹ヤブのそばを女や子どもが通りかかると、ヤブの中からバラバラと砂を投げかけられたそう。だれかいたずら者がヤブにひそんでいて砂を投げるなんて、そんなことのできる場所ではなかった。タメ池に住むカツパか、ヤブにひそむタヌキが悪さをするにちがいないと、あそこを通るときは、女子どもは、小走りに走り抜けた。

古国府から上野の峠を越える坂道は、いまは掘り割りができ、道はばも広く、自動車も苦もなく登っているが、明治ごろは、あの掘り割りの西の方から、細い急な道が登っていた。その坂をアブミ坂と呼び、両側から深いヤブがかぶさった、うすきみの悪い場所だった。

この一帯のヤブにキツネやタヌキがわんさと住んでいたそう、通行人は、しょっちゅうだまされた。明治時代、古国府に小野という材木屋があった。ここのおばあさんが信、心深いやさしい人で、毎日、残り飯を持って、キツネやタヌキの出る場所に出かけ、「悪さをするんじゃないよ。いいかい、わかったかい」と声をかけ、たずさえてきた飯を置いてきた。それが、おばあさんの日課となっていた。

だから、キツネやタヌキは、おばあさんには大いに心服していたとみえ、通行人がキツネやタヌキにつままれそうになると「材木屋さん」と叫ぶと、助かるといわれていた。

その材木屋さんは、大正にはもうなくなっていた。同時にキツネやタヌキの住み家もしだいに開拓され追放されてしまっ

た。あのいたずら者たちが逆に「材木屋さん、助けてッ」と悲鳴をあげたことだろう。

(注)▽県水産試験場の養魚場は現在、大分中央警察署南大分派出所がある付近。



オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第二十三章 ●南大分かいわい②

2008年1月18日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇渡辺克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。